

新型コロナウイルス感染症 緊急アンケート調査結果について

神奈川県下の民俗芸能団体がコロナ禍でどのような影響を受けているのか。その様相の一端を明らかにするために実施した、郵送による緊急アンケート調査の集計結果を次のとおり報告いたします。

実施対象団体は、神奈川県民俗芸能保存協会に所属する88団体の会員です。令和2年8月末日を締め切り日と設定して、7月25日に投函しました。その結果、9月14日時点で55団体から回答を頂き、回収率は62.5%となりました。

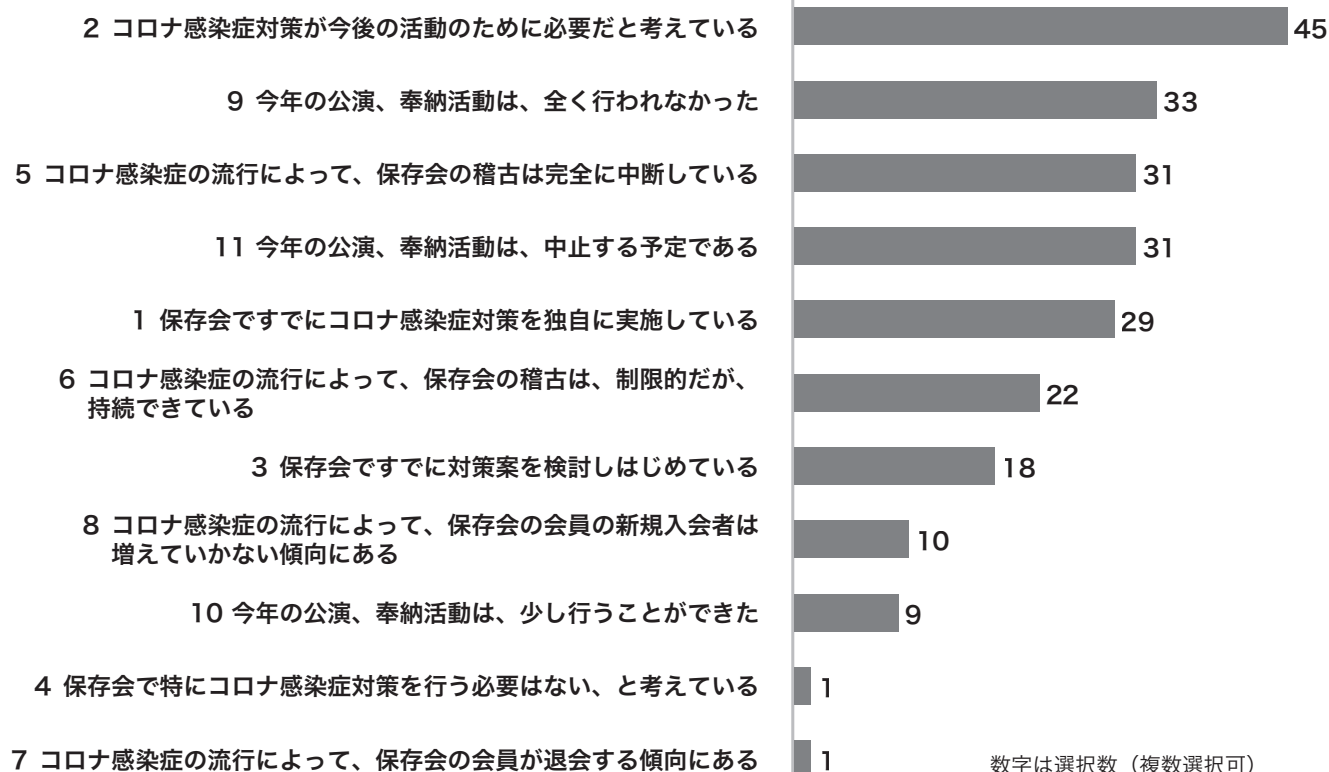
回答は9月30日に集計、整理して、10月17日開催の本協会理事会での協議、承認を得て報告したものです。調査結果はグラフ、要約及びコメントを付して示したものです。

ご回答いただきました会員各位には心からお礼を申し上げますとともに、本報告を参考に今後の活動に活かしていただければ幸いです。

神奈川県民俗芸能保存協会 会長 垣澤 勉

回答数： 55団体 団体数： 88団体 回答率： 62.5% アンケート調査期間 2020年7月25日～9月14日

1～11は、回答者が該当すると思われる項目を選択するものです。(選択数の多い順に並べています)



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

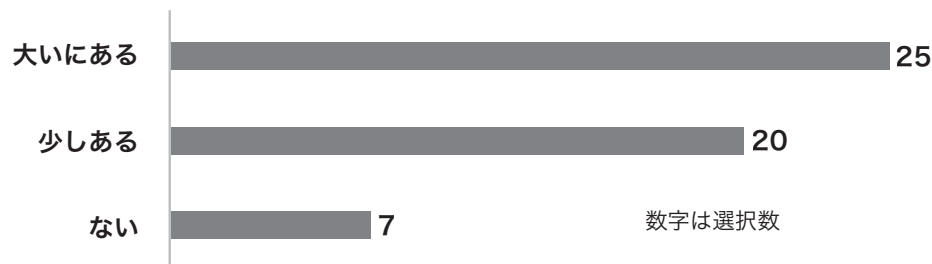
選択数の多い順にみていくと、**2**（保存会として、コロナ感染症対策が今後の活動のためにも必要だと考えている）が最も多く、81.8%です。コロナ感染症対策が今後の活動に必須であるとの回答ですが、これは現在の状況から至極当然の結果であるといえるでしょう。これに対し**4**（保存会として、特にコロナ感染症対策を行う必要はないと考えている）が1.8%ですが、催事が数年に一度の開催であるということから、現況の中であえて練習をしなくても済むという特殊な事情によるものでしょう。

次に選択数が多いのが**9**（今年の公演、奉納活動は、全く行われなかった）で、60.0%です。神楽、夏祭り、風流、獅子舞、古典芸能などのすべての芸能に共通しています。特に芸能が附祭となる祭礼の中止や密閉空間を伴う芸能大会などが軒並み中止となったためとみられますが、感染拡大防止の観点から保存会（団体）が自ら止むを得ず公演を中止したケースもあったようです。しかし、**10**（今年の公演、奉納活動は、少し行うことができた）が16.4%で、感染流行の前の開催だったのでしょうか。

9に続いて**5**（コロナ感染症の流行によって、保存会の稽古は完全に中断している）が56.4%です。保存会（団体）では、日頃から練習・稽古を行っておりますが、夏祭りの芸能、神楽、獅子舞などは祭礼行事に伴い集中的に行う傾向がある

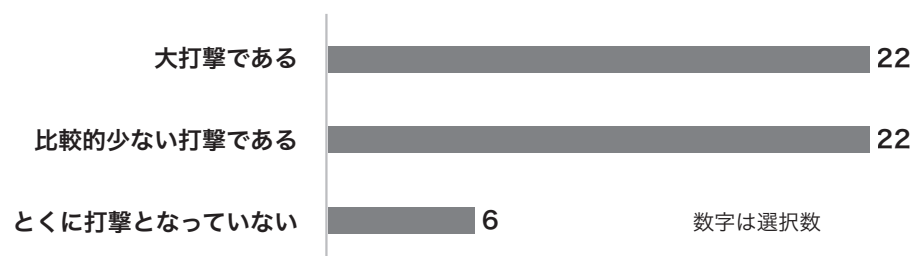
14 (コロナ禍によって、保存会長(代表)さん自身の心身に影響がありますか)は、大いにあるが16.4%、少しあるが30.9%、合わせると47.3%となり、およそ半数の方が程度の差はあるものの何らかの影響を受けているといえます。また、変わらないが41.8%で、影響あると変わらない(影響なし)が二分していることとなります。保存会長(代表)さんご自身の感じ方によるものですが、大いにある16.4%は13の相談する相手がいない12.7%に近い数字となっており、このような結果に反映されているのかもしれませんが。

15 保存会が伝える芸の伝承・継承について、コロナ禍は相当の影響がありますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

16 コロナ禍は保存会の活動にとってどの程度の打撃だと考えておりますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

15 (保存会が伝える芸の伝承・継承について、コロナ禍は相当の影響がありますか)は、大いにある45.5%、少しある36.4%、ない12.7%、また、16 (コロナ禍は保存会の活動にとってどの程度の打撃だと考えておりますか)は、大打撃40.0%、比較的少ない打撃40.0%、とくに打撃とはなっていないが10.9%です。大小合わせ影響があるは芸能伝承の影響が81.9%、活動の打撃が80.0%となり、多くの保存会(団体)に伝承のための活動に深刻な影響を及ぼしている状況が認められます。

17 インフルエンザの流行で、かつて、保存会の仲間が罹患したり、あるいは活動中に集団食中毒の経験はありましたか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

17(インフルエンザの流行で、かつて、保存会の仲間が罹患したり、あるいは活動中に集団食中毒の経験はありましたか)は、ない87.3%、ある7.3%で、今回のコロナ禍はほとんどの保存会(団体)がかつて経験したことがない初めてのものといえます。そのため対策に苦慮している状況が分かります。

18 コロナ禍の影響で、保存会を運営するための資金的困難(経済的困難)がすでに発生していますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

ため、祭礼行事の中止に伴う影響を受けたことも考えられます。

5と同数で、**11**（今年の公演、奉納活動は、中止する予定である）が、56.4%です。9月5日最終の本アンケートの調査時点において、その時点までの公演・奉納活動の中止に加え、以降においても感染再拡大の傾向もうかがえることから、今年（今年度）の活動は中止せざるをえないと判断していることが分かります。

1（保存会として、すでにコロナ感染症対策を独自に実施している）が次で、52.7%です。三密を避けるため、互いに距離をとり、消毒を行うなど具体的な対策をとっています。**1**の選択数は、次の**6**（コロナ感染症の流行によって、保存会の稽古は、制限的だが、持続できている）の40.0%に反映されており、従来通りの練習・稽古ではないが、対策を講じてある程度持続できていることが分かります。ここで、**1**と**6**を選択している例は、活動が一時期に集中しない古典芸能や風流に多くみられます。しかし、**5**と重複している例が2例ありやや混乱している部分も認められます。

また、**3**（保存会として、すでに対策案を検討しはじめている）は32.7%、**1**の52.7%と合わせると85.4%となり、多くの団体が最も重要なこととして認識していることが分かります。

感染の流行による会員の異動動向については、**8**（コロナ感染症の流行によって、保存会の会員の新規入会者は増えていかない傾向にある）が18.2%、**7**（コロナ感染症の流行によって、保存会の会員が退会する傾向にある）が1.8%です。新規入会者の確保の問題は従前からの難しい課題であり、コロナ禍がさらに悪影響を及ぼしていることが考えられます。しかし、退会者は全くないといってよく、コロナ禍の中で会のまとまりが強化されたともいえるでしょう。

12～18・21は選択肢を設定した設問です。

12 保存会の会員仲間と交流、顔合わせの機会が減りましたか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

13 コロナ禍の影響によって、保存会の現状に心配が出ていますか、どなたかに相談していますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

12（保存会の会員仲間と交流、顔合わせの機会が減りましたか）は、減ったが83.6%で、練習・稽古が中断していることから当然、交流の機会が減っています。変わらないが12.7%ですが、**6**の結果を勘案すれば制限的な練習・稽古の中でも交流が保たれているということでしょう。

13（コロナ禍の影響によって、保存会の現状に心配が出ていますか、どなたかに相談していますか）は、相談しているが43.6%ですが、相談する相手がないが12.7%あります。現状に不安を抱えながらも相談する相手がないという状況がみられます。

14 コロナ禍によって、保存会長（代表）さん自身の心身に影響がありますか？



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

18 (コロナ禍の影響で、保存会を運営するための資金的困難(経済的困難)がすでに発生していますか)は、いない76.4%、いる18.2%で、意外に大きな開きがみられました。資金的困難の要因は、祭礼・催事などの中止や縮小により出演料や謝礼金の収入が途絶えたことが最も大きいといえます。また、会費徴収について活動が停止したため見送るとか、感染防止のため対面による徴収を取り止めた例もみられます。資金的な問題は、保存会(団体)のみではなく、関連する子供会などへの影響も生じています。資金の減少は、当面の運営資金の他に諸道具や衣装の補修・新調など将来的な資金調達にも不安を投げかけている様子が見えます。なお活動停止により収入が途絶えたが、支出も生じないため、資金的な困難は生じないという例もあります。

19 保存会活動をするにあたって、感染防止は大事ですが、三密による飛沫感染、道具共有による接触感染、などなど現時点で一番気をつけたいことは何ですか。

最も多くの回答が三密回避の対策をとることでした。そのための具体策として、練習・稽古では、検温・手洗い・手指消毒・マスク・フェイスシールドを着用し、会場はなるべく広い場所を確保し窓を開けて換気を行い、2mほどの間隔を保つようにしているという例が多数ありました。しかし、中にはどうしても数人で密接して演じることが避けられない場合もあり、対策に苦慮していることがうかがえます。また、面や笛などは使用しないという対策もとられています。道具使用後は必ず消毒が行われています。そして、このような制限された練習・稽古の中で、マスク着用での激しい動きによる体力の消耗や芸能に対する意欲・やる気をどう維持していくか、非常に不安であるという回答が寄せられています。

20 保存会を継続運営していくにあたって、行政から、どのような支援があればいいと考えていますか(例えば、財政的支援、人的支援、補助金申請作成の指導など)。

回答の大部分が行政に対して財政支援を訴えています。コロナ対策としてアルコールや検温器などの購入費用が求められています。また、人的支援として公演活動及び会場確保、補助金申請手続きなどの指導助言も求められています。その他、情報収集と発信が必要であり、そのために継続的なアンケート調査を求める意見もありました。

21 コロナが発生してから、宮司、僧侶、祭礼世話人さんなどと直接に相談したりしたことがありますか?



アンケート 2020年7月25日～9月14日 計55回答

21 (コロナが発生してから、宮司、僧侶、祭礼世話人さんなどと直接に相談したりしたことがありますか)は、ない52.7%、ある29.1%で、相談していない事例が相談している事例のおよそ2倍近くになっています。催事、祭礼などにおける寺院、神社、自治会などと保存会(団体)との関係は一様でないのかもしれませんが。

22 その他、何かありましたらお書きください。

練習・稽古での感染だけではなく、広範囲に会員が所在する場合の会場移動の際の感染や役員の電車通勤に伴う感染を心配する声も寄せられました。一方、コロナ禍のときにできることとして、普段はできない仲間への丁寧な支援活動を検討している例や過去の公演の上映会を計画しているとの回答もあります。疫病退散の祈りが出来ず心苦しいという苦渋の声や練習・稽古が中断される中で、芸に対する気持ちが薄れていくのではないかと不安の声もあります。保存会(団体)の強い団結が必要であり、行政との緊密な情報交換が求められるとの意見もありました。

まとめ

コロナ禍の中で、多くの保存会(団体)が長年引き継がれてきた催事、祭礼、行事などの中止を余儀なくされ、保存会(団体)の維持や芸の伝承にあたって厳しい状況におかれていることが明らかになりました。しかし、こうした状況のなかにあっても感染対策を講じながら伝承を継続するため、できる限りの練習・稽古を続けていることも報告されました。

また、保存会(団体)の多くが財政的困難に直面しており、行政を始め関係機関の継続的な支援が求められています。同時に今まで以上に機会あるごとに保存会(団体)からの声を聴き、交流を通して細やかな支援も必要とされています。

困難な状況は、人と人との団結を強め、災禍へ立ち向かう力を醸成します。このようなコロナ禍の中にあってもこそ、保存会(団体)の団結、行政との連携強化を進め、現状に即した新たな活動を少しずつ展開していく必要があるのではないのでしょうか。例えば、対面を避け、新たなデジタルコンテンツによる情報発信などは、これからの継承を支える大

きな道具になると考えられます。

過去の大規模な感染症の災禍にあっても現在まで継続してきた庶民の民俗芸能を絶やすことのないよう、今回のアンケート調査の結果を次へのステップとして、本協会の力を一つにしてこの難局を乗り越えていかなければなりません。

保存団体へのインタビュー

アンケート調査と併せて、保存団体のうち4団体の方にインタビューを行い、現状を含めてご意見等を伺いました。ここでは、そのインタビューの内容をお知らせします。

長谷ささら踊り盆唄保存会

話し手：井上真弓さん（長谷ささら盆唄保存会会長）（文中「井上」）

聞き手：斉藤修平さん（文教大学生生活科学研究所客員研究員）（文中「斉藤」）

※コロナ禍により電話等でのインタビューで行いました。

斉藤 保存会が発足したのは、いつ頃ですか。また、発足の経緯について教えてください。

井上 昭和51年に発足しています。ただ、その前に引き継いできた組織があったのではなく、途絶えていたものでした。私の祖母、会田サト（明治14年生）が大正時代に風紀の点から禁止されていた盆唄を覚えていたことが契機になっています。サトは他所から嫁いできたのではなく、地元、長谷の生まれでした。人形芝居の座長をしていた、私の父である鶴由に永田衡吉さんから、ささら踊りの復活の話があり、保存会を設立することになった。その時、長谷の老人会、婦人会の人たちが20名ぐらい集ったそうです。私の父、鶴由（明治42年生）が設立に関わったそうです。踊りは、農閑期にやっていた。七夕からお盆にかけて、やっていた。昔は、そうした時が男女交際の場だったそうです。若い女性が踊り、男性は松明を持っていたそうです。浴衣、帯、襷、前掛けの格好で、今もやっているので、昔もそうであったと思います。道具は、びんささらと太鼓です。私自身は、平成5年に加入しています。その頃は参加する人が10名ぐらいで、踊りの輪が、丸くならない状態でしたが、20年ぐらい前から少しずつ増えてきて、現在は、22名の会員が継承しています。昔は、長谷の人たちだけで活動していたのですが、それだと根付くのが大変。今は、厚木市全体から参加してもらっています。長谷の人は、3名います。

斉藤 本家の長谷の人が少ないですね。長谷のささら踊りを厚木市民の有志が継承されているわけですね。

井上 私も、長谷には住んでいないのです。車で実家まで15分ぐらい、出来れば、会長役は地元の方に戻りたいのですが。

斉藤 どのような考えの人たちが集まっているのですか。

井上 郷土芸能という意識を持って取り組まれておられる方、楽しみで参加されている方もおられます。祖先から伝わるものを楽しくやっていきたい、という雰囲気は保存会にはあります。時代は令和だし、あまり文化財ということで縛られなくても良いように思います。私は、30代後半に加入したのですが、最初は「何、この踊り」という印象でした。やがて、続けていくと歌詞の意味や、踊りの意味もそれなりに理解できるようになりました。

斉藤 この保存会活動の楽しみ、目標はどのようなものですか。

井上 厚木市主催の芸能祭、普及公演、そしてささら踊りの連合大会に参加して、踊ることを目標にしています。そうした公演があるときになると、稽古をします。例えば、愛甲のささら踊りとの掛け合いなど、要請されますと、稽古の日数を増やします。私たちの踊りは舞台で評価されるのですが、「しっかりやりたいね」、という気持ちがありますから、稽古はしっかりやります。

斉藤 さて、新型コロナの影響ですが。

井上 まず、年3回の公演が中止になりました。また、時々、定例の3回の公演以外に、1回から2回ほど出演依頼がありますが、それも全くありません。会員は、公演前に久しぶりに会って稽古するというリズムがありますが、今年は舞台がないので、会うことがなくなりました。万一、公演の参加依頼があったとしても、お断りしようと考えていました。「コロナは姿が見えない」「感染したら一人じゃ済まない」「どうしても20名でやるものだから、稽古でも舞台でも密になる」という会員の声を伺って、活動を止めています。例年であれば地元の長谷の自治会館で午後から2時間ほどお稽古します。皆さんの顔を見たいのですが、何かあったら責任が取れない、という気持ちです。今年は、昨年秋から60歳代も前半の方を含め4名の方が入会されました。慣れていただくための稽古ができません。一番気がかりなのは、高齢者の会員のモチベーションが下がることです。舞台もない、従って稽古もない。今年度は会の運営については見通しがないですね。踊りそのものは、素朴な輪踊りで、踊っている人の後ろについていけば、楽に覚えられます。唄を歌う人が二人いますが、唄を覚えるのは少し時間がかかります。後継ということであれば、唄ですね。ビデオの記録もしてあります。

齊藤 長谷の人たちの関心度合いはいかがですか。

井上 色々な娯楽があるから、あまり興味を示さない人が多いのが現実です。長谷生まれの地元の人でも、知らない方がいます。この踊りの背景を知らない人たちが多くなっています。この踊りを伝えていく活動は、踊りを通して出来た人間関係です。踊りのとき必ず会員と会える、これが財産です。経済面では、会費と補助金があるので大丈夫です。とくに道具というものが無いので、費用もかからないので一年間ぐらいいは、活動がなくてもしのげると思います。とりあえず、皆さんと会いたいですね、でもね、という状態。顔見たくくなりますよ。

齊藤 来年もコロナ禍が続いたらどう考えますか。

井上 来年もできなかった、どうだろう。正直わからないです。踊りは簡単だから、体から抜けることはない。唄は個人的に稽古できます。あとは、会員の気持ちです。「もういいよ」ということになったら、危ない。こういう気分になることが心配です。先は読めないですね。来年の7月の第二木曜日に、ささら踊りの大会予定日が決まりました。同じささら踊りの仲間、8団体の大会です。継承団体の仲間があることは頼りになります。

相模人形芝居 長谷座

話し手: 相模人形芝居長谷座 副座長 井上真弓さん (文中「井上」)

聞き手: 齊藤修平さん (文教大学生生活科学研究所客員研究員)(文中「齊藤」)

※コロナ禍により電話等でのインタビューで行いました。

齊藤 井上真弓(昭和31年生)さんが、長谷座の人形芝居に関わることになった経緯を教えてください。

井上 私の父、会田鶴由(明治42年生)が19歳から人形芝居をはじめたと聞いております。そして、父が昭和46年になって、座長を引き継ぎました。そうしたことが縁になっています。さらに、鶴由の祖父も長谷座で活躍していた、ということも聞いています。現在、座長は鶴由の長女である山口熱子(昭和23年生)、私の姉です。その姉が体調を崩しているのが副座長の私が代行して、会計の鈴木好子さんと座の運営をしています。長谷座の会員は、平成5年までは、長谷の人たちだけで継承していましたが、今は厚木市内から会員を募集して、活動しています。今は、長谷以外からの座員割合が高くなっています。

齊藤 女性座長、山口熱子さんが最初ですか。

井上 座長は、父の鶴由から山口寛造さん、そして富田温子さん、そして山口熱子ですから、女性初の座長は富田さんです。富田さんのご都合により、座員の皆さんで相談して、山口にお願いとなりました。同じ山口姓ですが山口寛造さんと親戚関係ではありません。

齊藤 長谷の様子を伺います。

井上 長谷は農村。お米と野菜と果樹栽培で暮らしていた地域です。私が小さい頃は、だいたい100軒ぐらいの村だったようです。昭和28年、県指定になり、長谷の青年団の若い人たちが、この人形芝居を習ったそうです。若い方が覚えも早いですからね。

齊藤 現在、何演目、上演できるのですか。また、一回の稽古が5時間ぐらいいと伺っていますが、かなり長い稽古時間ですね。

井上 16演目ほど、稽古しているので上演できます。5時間の稽古の中身ですが、まず集まってもらって、人形の準備からはじまります。手足や首をつける、「仕立て」という仕事があります。それから、基本の稽古があります。これはどの演目にあっても、必要とされる稽古。立ち役の稽古、女形の稽古を通していくのです。主遣い、足遣い、左遣いを通していくのですから時間がかかります。一度、休憩して、それから演目の稽古になっていきますから、稽古時間は5時間となっています。でも、6月に長谷座の総会をやってから、何もやっていません。冬になるとインフルエンザも心配になって来ます。人形遣いは、三人遣いですから、稽古は三密そのもの。今後も集まって稽古することは考えていません。来年の3月までは考えていません。このまま会わないで、モチベーションが維持できるかどうか。とにかく、ビデオ稽古を考えています。手指消毒は出来ても、三密は避けられないので、稽古は無理ですね。座員も若い人はリスクが少ないけれど、高齢者は稽古場への顔出しも難しい。座員の高齢率も高いので難しいです。

齊藤 人形遣いが密状態になることは、理解できます。鳴り物はどうですか。

井上 二人遣いの三番叟についてですが、太鼓と鼓と付け打ちの鳴り物がありますが、密の状態にはなりません。声を出すような科白もない、科白は遣い手だから。

齊藤 現在の年齢別の会員構成を教えてください。

井上 20代が2名、50代が3名、メインである60代が6名、70代が2名です。女性が圧倒的に多くて、男性は4名です。人形芝居は、歌舞伎と同じで男の芸能でしたが女性が中心になってきました。昔は、女性は手伝いをやってくれる、そのような役割でした。長谷座は、地域のどこかの特定の家を中心になってやってきた、というものじゃなくて、あくまでも長谷の人たちが皆さんで運営してきました。地元の人たちがもっと参加してもらいたい、と思っています。

齊藤 人形芝居は、伝承芸能としては引き継ぐものが多いから大変じゃないですか。

井上 お芝居ですから覚えることがたくさんあります。出演を頼まれると、道具、衣装、小道具、それから舞台作りもあるので、かなり大変です。同時に、道具の保管、管理などの費用も必要なので、計画的に補助金を申請しています。

斉藤 人形芝居を伝えていくため、会員はどのぐらいいたら、という希望はありますか。

井上 最低でも15名、それが目標です。というのは、演目によっては、人形が5体でないとは出来ないのです。公演に出られる座員がどうしても、継承の点からも15名が必要、目標となっています。個人差もありますが、最低でも3年は稽古しないと、主遣いではできないので人形芝居の継承は大変です。

座長である鶴由が平成5年に亡くなりました。次の山口寛造座長が亡くなれば、平成13年に人形芝居に精通する古老が多く辞めていかれ、継承が本当に難しくなっていました。座として、危機感があって、指導者を探すことになり、八王子の西川古柳家元さんのところに指導をお願いすることになりました。平成17年から稽古をお願いしています。年間に、8回から10回ぐらいお願いしています。

斉藤 新型コロナの流行となって、活動が止まっています。

井上 そうですね、座員が稽古で「三密」を防ぐことは難しい、という意見がありますから、稽古は中断です。顔合わせしていないから、長谷座の活動ができない。「もういいか」という気分になってしまわないように、したい。稽古は、近くの南毛利学習支援センター、南毛利公民館、長谷の自治会館などで行うのですが、1回の稽古がほしい、5時間です。

斉藤 超長い稽古時間ですね。

井上 そうですね、月に2回の稽古、ですから一年に24回の稽古と公演前の稽古をやっています。それとは別に西川古柳先生から習う稽古があります。今年は、後継者育成の事業がありまして、なんと18名も応募があったので、座員獲得に希望を持っていたのですが、コロナのためにこの企画が中止となり、後継者問題は大打撃となっています。地元の長谷でも声がけをして座員獲得に力を入れていますが、これからどうしたらいいのか、という気持ちです。コロナで継承リスクが高まりました。地元の長谷でも、自治会から補助金が私どもに出してもらっているのですが、人形芝居への関心が下がる傾向にあります。人形芝居の道具は、長谷の自治会館の脇のところに倉庫があり、そこに収納していますが、コロナで稽古もできないので、道具類はそのままなので、確認しに行っています。稽古だけではなく、道具、衣装類の管理も負担になっています。10月になったら、稽古は出来ないけれど、距離をとってビデオで稽古したいと考えています。神奈川県内には人形芝居の保存会が5団体あります。このコロナ禍でも、稽古している団体もあると聞いて驚きました。

斉藤 ところで、公演先の一つに、神社での祭礼があります。

井上 昔ほど地元の堰神社で演じても見物人は多くありませんが、人が戻ってきた感じもあります。昔は、一晩に10演目も上演したそうです。

斉藤 やはり、芸能は現場、舞台という場所が大事ですね。例えば、人形芝居団体の公演開催決定とか、厚木市役所で公演開催決定とか、何か動きがないとこのままの状態ですか。

井上 コロナの状況は、日々変化していますから、どれかを判断基準にして、活動再開するのかが決めるのは難しいです。やはり、座員の感染リスクを背負っているから、周りよりも座員の思いが優先ですね。ただ、やってみましょう、というのは無理です。土曜日（10月17日）に学習支援センターで1時から3時まで座員の方々、6名と相談しました。しばらく稽古していないので、ウズウズしている感じで、様子を見ながらやってみましょう、ということでした。

今回は、ビデオ学習を実施しました。今年の2月の舞台ビデオと人形芝居の基本の動きを録画したビデオを見ました。この会場には大型画面が用意されているので、活用しました。これまで、お一人、お一人にビデオ録画したものを回覧していたのですが、それだと自分のお芝居を自分で判断していたわけですが、大勢で、公演ビデオを見ますと、新しい発見ポイントがあるのです。「あそこの動き、こう言っていたけれど、直ってないね」というような会話が一緒に見ていると生まれてくるのです。確かに、稽古のときもビデオを利用して、動きを見ていたのですが、その次の動き、次の場面について関心があって、ゆっくり、しっかりビデオを見ていなかったわけですが。稽古の合間にビデオを見ないで、ビデオ鑑賞に集中しているから、感想が出やすいわけですが。今度は11月21日にビデオ稽古を行うのですが今度はビデオ鑑賞だけでなく、人形芝居の道具を出して、立ち役の足遣いだけ稽古をしてみよう、ということになりました。三人遣いの稽古は三密になるから、無理ですが部分的な稽古はやってみよう、ということになりました。体温計（非接触型）、稽古をする部屋の換気をしっかりやって、手袋を用意して取り組もうと考えています。

斉藤 ビデオ稽古、やってよかったですね。

井上 思いのほか、よかったです。6月14日の長谷座の総会に13名が参加して、今回は6名が参加しました。座員の負担を一つ一つ確かめて、これまで5時間の稽古を、例えば3時間とか、短時間にします。無駄を省いて、意識を変えていくことですね。2月公演を最後に、舞台はありませんが、3月のはじめに、公演が予定されていたので、稽古は2月にやりましたが、それ以降、稽古はゼロ。今年も、同様の活動を予定していましたが、4月からもちろん活動はゼロの状態です。松蔭大学での人形芝居の体験教室も予定していましたが、5年間も大学と共同でやってきたので、中止になったのは残念ですね。今年の活動状況については、メモを送付しますので参考にしてください。

斉藤 2019年（平成31年、令和元年）から2020年のはじめにかけての長谷座の公演実績をご提供いただきましたので、そのまま紹介させていただきます。南毛利小学校公演後は、コロナ感染で予定されていたものがすべて中止になりますから、公演と稽古という根幹の活動が失われてしまいました。

2019年～2020年の長谷座公演日誌（場所と演目一覧）

- 4月14日 堰神社祭礼・三番叟、傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）
- 6月18日 南毛利保育所・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 8月27日 くれよん保育室・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 9月7日 南毛利公民館・寿式三番叟、団子売り○
- 9月18日 もみじ保育園・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 9月29日 老人ホーム・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）
- 10月16日 愛歩保育園・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 10月19日 松蔭大学・寿式三番叟、団子売り
- 11月10日 厚木市郷土芸能まつり・傾城阿波の鳴門（十郎兵衛住家の段）
- 11月15日 依知南公民館・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 12月7日 あつぎ郷土博物館・寿式三番叟、団子売り○
- 12月11日 清水小学校・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 1月15日 玉川保育所・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 1月17日 飯山小学校・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○
- 1月30日 有馬高校・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）
- 2月11日 相模人形芝居大会・傾城阿波の鳴門（十郎兵衛住家の段）
- 2月21日 南毛利小学校・傾城阿波の鳴門（巡礼歌の段）○

* * * * *

井上 少し詳しく説明しますと、○印を末尾に付した公演は、厚木市が主催している郷土芸能普及公演となっています。松蔭大学の企画は、人形制作及び操作体験という内容を持ち、全11回にわたって行うものですから、私どもとしてはこの企画がコロナで失われるのは、かなりショックです。また、市内の保育園、小学校などをめぐる、12回の公演も私たちの活動を支えてくれる機会なので、いつか戻って欲しいです。

老人ホーム公演というのは、老人ホーム・ベストライフ本厚木での開催です。郷土芸能まつりは、文化会館小ホールでの開催、有馬高校の企画は、相模人形芝居学校交流ワークショップ公演という名前が付いており、公演と体験学習が組み合わせになっています。相模人形芝居大会は、県立青少年センターでの公演で、県内に伝わる人形芝居、五座が集まって開催しています。市民協働提案事業、という事業で3月1日に予定されていた公演、そして3月8日に予定されていた南毛利公民館まつりでの公演は、コロナの感染拡大防止の事情で中止になってしまいました。

公演活動はコロナ感染事情もあるので、中止となりましたが、今後は工夫して、そして感染対策を講じて、新しい方法での稽古が続けていければ、と考えています。

斉藤 以前に4つの質問を用意させていただき、座員さんのお気持ちを伺ってみたいと私から井上さんにお願ひしました。皆さんの思いですが、〈長期間にわたって稽古中断、舞台もない状態〉にどのような声が届いていますか。

井上 ①やはり、あまり長いと忘れてしまいそうで、怖い。②納得して、早く再開することを祈っている。③長いと感じているが、稽古は何を持ってOKとするか分からない。④長いと思うが状況が変わっていないので納得している。⑤さすがに長いと感じている。そうした回答ですね。

斉藤 それから、〈生きがい喪失〉みたいな感覚が座員の方にもあるかもしれないと想像していますが、いかがでしたか。

井上 その質問については、①つまらないというか、早く人形を遣いたい。②特にない。③感じます。早く公演、稽古がしたい。④はやくコロナが収束することを祈っています。⑤手持ち無沙汰を感じます。というような回答です。

斉藤 しばらく会っていない座員さん同士ですがどのようなお気持ちになっているのでしょうか。中断中の〈座員同士のコミュニケーション〉ですね。

井上 ①ラインで一応、繋がっておりますが。②やはり、皆さんと会わないと寂しい。③ストレス解消の場がない。はやく稽古がしたい。④座員の皆さんが元気かどうか心配である。というような回答ですね。

斉藤 それから、〈稽古中断中の自主稽古〉の様子ですが、いかがですか。

井上 ①あまりしていませんが、DVDを見たりしている。②今までの演目をビデオで見ながら、稽古しています。③ビデオを見る程度。たまにやってみたがブランクが心配です。④やっていない。そのような回答でした。

斉藤 稽古、舞台が戻ってくることを待つ座員さんの気持ちがよく伝わる回答です。新型コロナ収束に数年かかる、ワクチン開発・接種が始まれば安心とかインフルエンザと同じようにウィルスは消えないが落ち着いていく、とか。新

型コロナをめぐる専門家の「解説」は色々です。まずは現状報告とさせていただきます。井上真弓さんのご協力に感謝申し上げます。

ちゃっきらこ保存会

期日・場所：2020年（令和2年）12月9日 三浦市役所

話し手：ちゃっきらこ保存会 事務局長 飯島 重一さん（文中「飯島」）

聞き手：高久舞さん（帝京大学文学部日本文化学科講師）（文中「高久」）

高久 2021年1月15日のちゃっきらこは中止となりましたけれど、中止になるまでの経緯を教えてください。

飯島 ちゃっきらこは、1月15日と日程が決まっているため、その日程を目指して来る人が多くいます。見学者を減らすために、別の日に開催しようという案もできました。しかし、最終的には中止という判断となりました。

高久 いつぐらいに決定したのですか？

飯島 決定したのは10月のことです。保存会で会議を行なった際に決定しました。保存会長、副会長、理事である音頭さん（歌手）らで話し合いました。

高久 2020年1月15日はまだ新型コロナウイルス感染症も世間を賑わせていませんでしたよね。その後はどんどん感染拡大していったわけですが、2020年度の行事でできなかったことなどはあったのでしょうか？

飯島 毎年、ちゃっきらこを卒業する6年生には3月の小学校卒業に合わせて感謝状を送っています。子どもたちが通う小学校の協力を得て行なっています。2月終わりから休校になってしまったので、それまでに渡せた子どもはいたものの、何人か感謝状を渡すことができませんでした。

それで、緊急事態宣言も解除された7月に仲崎会館に来てもらってやっと渡せました。感謝状を渡すようになってから、このような事態は初めてのことでした。

高久 練習はその仲崎会館で行なっているんですよね？

飯島 練習は必ず1月7日から始めます。なので、2021年1月15日に向けての稽古はしていません。

高久 ほかの団体さんと、稽古ができずに奉納などを中止せざるを得なくなった話も聞きますが、ちゃっきらこ保存会の場合は稽古前に中止が決定したのですね。

飯島 仲崎会館は縦に長い建物で、子どもたちとお母さんたち、音頭さんたちが入るといっぱいになってしまいます。以前、1月7日から練習をはじめて15日の当日になって7名ほどインフルエンザにかかって、急遽当日だけ出演することができなくなったことがありました。広い会館ではないので、インフルエンザが、気が付かないうちに蔓延してしまったのです。

その経験から今では会館に入る前にはかならず消毒をして、マスクをして、換気をしながら練習しています。

感染対策をすでにやっている中で、これ以上の対策はできず、それでもコロナになってしまったときにリスクを鑑みたことも、中止に至った理由の一つとなりました。

高久 コロナ以前から感染症の対策はされていたのですね。では、1月15日は神事も行わないのでしょうか？

飯島 本宮で行なう神事だけは、保存会会長ら幹部のみが集まります。でも、楽しいのは神事ではなくそれ以外のところでしょう？民俗芸能や祭りは楽しんでやりたいと思っています。楽しくやりたいのに制約があるとなかなか楽しめません。皆が安心して練習も本番も迎えたいとも考えました。

高久 おっしゃる通りですね。以前にお話を伺った時、6年生の数が多かったと聞きました。2020年で6年生が卒業して現状どうなのでしょう？

飯島 今、一番上は5年生です。2021年は元々6年生がいない状況で行なう予定だったんです。

高久 最後の年がコロナでできなくて卒業するという子はいないということで、ちょっとほっとしますね。でも、今回中止して練習も行わないことで次に入る子たちが1年空いてしまいますよね。

飯島 今年入りたいという子が何人かいたので、その点は残念です。ただ、やはり子どもが中心の民俗芸能なので、現状では無理はできないと考えています。

高久 入りたいという子は自然と出てくるものなのでしょう？

飯島 自らやりたいという子もいますし、こちらから声を掛けることもあります。音頭さんのお孫さんとかが入ることも多いです。

高久 少子化の問題でどこの団体さんも入る人が減っていて次への伝承に困っているという話も聞きますが、ちゃっきらこ保存会ではいかがですか？

飯島 やはり少子化はあります。マックスで30名いたときからは減ってきています。

高久 何歳ぐらいから入れるのですか？

飯島 幼稚園ぐらいですね。4、5歳ぐらいからです。

高久 子どもの頃に経験して、自分の子どもにやらせたいという親もいるのでは？

飯島 そうですね。そういう子も中にはいます。

高久 自分が経験して、その子どもに、孫に、という循環ができるといいですね。

飯島 おそらく、大人だけだと停滞してしまうと思います。6年生で卒業して、小さい子たちも入ってきて、そうやって循環しています。かつての青年団もそうだったように、年齢を区切ることで循環が生まれるのでしょうか。

高久 音頭さんはずっと同じ方なのですか？

飯島 そうですね。ただ、自分の年齢があがっているのでも若い人もいると思うのですが(笑)、もう少し新しい人も入ってくればいいですね。

高久 ちゃっきらこ保存会は、1月15日だけではなく舞台に出ることも多いように思います。2019年は、はまぎんホールの「かながわ民俗芸能祭」にもご出演されていますよね。

飯島 ありがたいことに、お声掛けいただくことがあります。

高久 コロナ禍では舞台出演が叶わないことも多いと思いますが。

飯島 そうですね。舞台に出ることは子どもたちにとっても励みになるので、また落ち着いたら舞台にも出演したいです。

浦賀虎踊り保存会

期日・場所：2020年（令和2年）12月19日 横須賀市浜町町内会館

話し手：高畑昌弘さん(会長)、紙谷保さん(笛)、島啓子さん(唄)、筑川さん(町内会役員)、茂木鉄也さん(太鼓、笛)
(文中「高畑」「紙谷」「長島」「筑川」「茂木」)

コーディネーター：金子隆一さん

聞き手：高久舞さん（帝京大学文学部日本文化学科講師）(文中「高久」)

高久 2020年度の祭礼、虎踊りの中止はどのような段階で決定したのですか？

高畑 まず1年の流れをご説明しますと、虎踊りは6月の祭礼で奉納します。その後、市の民俗芸能大会が行われます。全団体が参加するのは2年に1度、文化会館で行なっていますが、文化会館で大会を行わない年も手を挙げた数団体のみが参加する小規模の大会が行われています。うちは毎年手を挙げています。また、それ以外にも1年に1回はホテルなどで呼ばれて出演することがあるので、年に3回は虎踊りを演じる機会があります。今年は祭礼以外もすべて中止となってしまいました。

高久 祭礼はどの段階でどなたが中止と決めたのですか。

高畑 町内会の役員会で決定しました。町内会の役員は虎踊りの役員も同じなので、保存会で改めてと言うよりも、祭礼とセットで考えました。舞台を境内に作りますし、人手がかかります。お祭りではないと人が集まりませんので。

紙谷 コロナの自粛要請が出た3月半ば過ぎに決定したと思います。

高畑 うちの町会の祭礼は6月ですが、隣の町内会では一ヶ月前の5月に祭りがあります。祭りのときには互いに連携して協力しています。4月頭には協力をお願いしますし、横須賀市の民俗芸能協会などにも招待の関係があるから早めに伝えなくてはならないため、中止か否かの決定は3月にはしなくてはなりません。我々より先に隣の町内会では中止が決定しました。

紙谷 東京の三社祭が中止となって、隣の町内会も5月の祭りが中止したので、うちもできないだろうという話に自然となりました。

高畑 それと、ちょうどこの時期に三密という話が出てきて。うちの虎踊りは三密が避けられないという話になったんです。囃子はまだいいとして、虎は着ぐるみタイプですから。

高久 確かにそうですね。人数は総勢どのくらいの数になるんですか？

高畑 総勢で付き添いも含めると48名くらいです。子どもがやる唐子さんが10名。昔はもう少し少なかったのですが、会場が広いところで演じることが多くて人数が多いほうが見栄えもいいだろうとなりました。囃子は15名、それに虎、大唐人、和藤内がいて、練習では親を含めてこの浜町町内会館に3、40名が集まることになってしまいます。

高久 本番というよりもお稽古が難しいということが中止を決定する際の理由の一つになったのでしょうか？

高畑 稽古よりも、やはり虎の問題が大きいです。二人一組ですし、完全に袋に入って、汗びっしょりになりますから。

高久 練習は年間を通して行なうのですか？

高畑 練習は祭りの1週間前からです。囃子は固定メンバーですから、何年もやっているのだからさっと合わせてできますが、子どもたちは毎年変わりますので練習が必要です。毎日通して何回も行ないます。

高久 唐子は小学生が中心ですか？

高畑 唐子は衣装が小学生サイズですから基本的には小学生です。ただし、1年生だと体力的にも厳しいし集団行動も難しいので、2年生から6年生です。

高久 三味線も町内の方なのですか？

高畑 町内に縁故の方です。今虎踊りに参加しているのは、町内会の者か、その縁故の者、唐子さんは友だちで、町内会と何かしら繋がりがある人達で構成されています。以前、三味線は外部の方をお願いしたこともありますが、なかなかうまくいなくて。

茂木 虎踊りの囃子は笛がリードなので、浜町で三味線をずっと演奏していたおばあちゃんは笛に合わせて三味線がどこからでも入れるんですが、慣れてないとそれが難しいんですね。民俗芸能の三味線は、他の芸能の三味線とは少し違いがありました。

高畑 そんなこともあって、まったくの外部の方が入ることは慎重になっています。

高久 囃子の方たちも含めて15名いらして、お一人が歌ということですが、地域のなかで後継者を育てていきたいとお考えなのですね。

高畑 基本的にはそうです。ただ、趣味的要素だけなので指名して「やれ」とは言えません。

長島 歌は言葉が今の言葉じゃなくて難しいんです。だから、聞いただけで覚えられそうにないと言う人が多いんです。慣れちゃえばどうってことないんですけどね。

高久 三味線とか太鼓とか笛は、歌と違って自分の声を出さなくていいから、歌よりもやりたいという話を聞くことがあります。

長島 そうそう。

高畑 はっきりとした後継者がいないから育てていかななくてはならないのですけれど、長島さんが健在なので、真面目に考えていないところがありますね（笑）。

紙谷 そうだね。

長島 子どもたちに教えたこともあったんですけど、すぐに飽きちゃってうまくいきませんでしたね。笛のほうがいいわって（笑）。

紙谷 笛は3人います。いま、祭囃子は茂木さんがお師匠さんになって子どもたちに教えているんですけど、小学生の時は熱心でも、中学生になるとやらなくなってしまうことがあるんですよ。

長島 歌はいま1人でやっているから、1人でやるものだと思っているふしがあるんですよ。

紙谷 そうそう。でも昔は2人でやっていたしね。

高畑 親の代くらいは、50年くらい前は虎も複数人でやっていたんです。築川さんのお父さんもそうでしょう。

築川 母親は歌をやっていたよ。父親は会長をやっていましたよ。

高畑 今の私と同じ、役はやらずにバックヤード側ですね。

高久 でも、そのような役割がとても重要だと思います。交渉なども演者がやるのは大変なので。

茂木さんは祭囃子を教えていらっしゃるとのことですが、虎踊りの演者とは異なる人達が演奏されているんですか。

茂木 兼任者が多くですね。祭囃子を導入として虎踊りに誘うのも狙っていますが、練習は年間を通じて行なっています。

高久 今年は祭囃子の練習もできなかったのですか？

茂木 そうですね。ここの会館が使えなかったの。

高畑 今までの経過から考えると、会館でお囃子の稽古は、ディスタンスをとりながらできるよね。

茂木 他所とも連携をとって、すこし動き始めています。横浜市では緩和されてきて12月からは笛の演奏ができるようになりました。ただ、行政の動きが後追いですから、おそらくまた難しくなってくると思います（12月19日時点）。

祭囃子は練習をやっているところもあるんですけど、横須賀は高齢化していますし、虎踊りは年齢が上の方も関わっているし、そのあたりを考慮すると今はやるべきじゃないとも思います。

子どもが育たないことを心配はしているのですが、体さえ元気であれば。焦らず無理しないで考えていきたいです。本当だったら12月頃というのは、会長が目星をつけて、新しい子に声を掛けている時期なんです。伝承への焦りはありますが、民俗芸能離れはどこもあるの。

高久 今年中止されたことで今後の伝承への不安はありますか？

高畑 大ありですね。唐子さんができる子どもが10名いないんです。

茂木 囃子もそうですね。育てたくても子どもがいない。コロナ以前からの問題です。

高久 子どもたちは、町内会が数人ということは、外から来ているんですか？

長島 お友達が多いですね。高坂小学校の学区の子たちです。

高畑 小学生のメンバーで町内にいるのは3名位しかいないんです。あとは近隣に住んでいる子、あるいは町内におじいちゃんがいるという子もいます。

茂木 おじいちゃんが孫を連れてきたケースもあったんですが、だんだんと連れてこられる孫自体が少なくなっていますね。

高畑 困るのは、子虎と和藤内です。子虎はまだできるんですけど、和藤内は衣装が決まっていますから。今まで町内の子がやっていたのですが、今年はできないことがわかっていました。それで、目星をつけてお願いしていた子がいるんですけど、その子が来年大きくなっちゃったらまた新たに探さなくてはなりません。

去年は和藤内の真似をしているという子がいて、見込みあるぞって話がありました。

高久 子どもを供給することが難しいということですね。

茂木 第二次ベビーブームの子どもが今までやってくれていたけれど、それが細くなってきているんです。

高畑 うちの町内は未就学児が1名しかいないんです。それ以上は小学生になるまでいない。これは危機的なことです。

紙谷 みんな出ていっちゃうから、親と同居していることが少ないんです。

高畑 2019年までは綱渡りではあったもののなんとか続いていたのですが、今年（2020年）にやっけても役に穴が空く（人数が減る）という状況でした。

高久 この数年をどうするか、実はコロナの数年前から問題にはなっていたということですね。

高畑 学校に行ってお願ひすることも一案かとも考えています。

茂木 最後の頼みは学校ですけれど、学校単位で考えるとトラブルの元にもなるとも考えています。責任問題もありますし。できれば、学校の前に近隣町内とかにお願ひして、浦賀地域で若い衆なり年配の人なりに声を掛けていくのが、まずできることだと考えています。

他にも、町内会とか保存会ではなくて学校に全面的にお願ひして、町内会がサポートしていくというやり方もあると聞きます。

高久 それは大きな変化ですね。

茂木 文化財を残すための手段ですね。

高久 みなさん、いろいろな知恵が素晴らしいと思います。いつやめるかというタイミングを踏るのではなく、どうするか考えていらっしやる。

高畑 もうやめようという話は一度も出ていませんね。

長島 細々でもやろうとしています（笑）

高久 今年中止のところで、「やらないと楽だったね」なんて笑い話も聞きます。

高畑 今年は楽でした（笑）。いつもどれだけ大変だったか。

高久 負担を感じないような形を考えるのも一つかもしれませんね。

紙谷 それは本当に難しいです。誰かが頑張らないとできないことですし。

高久 最後に伺いますが、来年の6月の予定は決まっているのでしょうか？

高畑 今の雰囲気では、役員の中ではできないんじゃないかという話が出ています。先程話したように、虎の三密をどう考えるか。避けようがない問題なので。

茂木 一人立ちの獅子舞だったらまだいいんです。二人立ち以上の獅子舞や虎舞でも中が離れていれば距離も保てますし、形態も風通しが良ければなんとかなります。ただ、うちの虎は着ぐるみタイプですから。

大昔は、今のような形態ではなかったという文献があります。昔は門付けをしていたので、門付けだと今のような着ぐるみタイプだとできませんから。どうやら、小さい舞台が移動していたらしいんです。それで昔の家だから平屋の屋根に乗って演じていたといひます。若い連中とは門付けを復活させたいなんて話もしています。

もし、この状況が今後もしばらく続くようならば、虎の形態を少し変えて三密を避けるようにするのも一案かもしれません。

高畑 奉行所が下田から移って今年で300年なんです。それと、為朝神社も創建200年なので、去年（2019年）の今頃は盛大にやろうと言う話でした。今年（2020年）できなかつたから、来年（2021年）やろうと話しているんですが、やはり再来年になるかとも考えています。今回は中止にするならば3月以前に決めざるをえないとも思っています。

高久 今年（2020年）できず、また来年（2021年）もできないとなると、子どもたちへの伝承も気になってきますね。

高畑 毎年平均3回演じるというローテーションでやっていますから、当然今年も、来年もそのつもりだったと思います。今年、まるまるとできなくてどういう変化があるかは心配ですね。

話が少し逸れますけれど、先月釜石から2021年2月に大会があるからリモートで出演してほしいという話があったんです。でも、リモート以前に練習ができない、虎の三密も避けられないということで、お断りしました。

リアルタイムだったら、ステージも用意しなくちゃいけないし。お断りした後公民館の館長に話したら、行政センターで練習できるようにするよって言ってくれたんですね。ただ、練習場所がここ以外ではできないでしょう。

紙谷 できないね。

高畑 学校なり仕事なりが終わってから集まれる時間と場所であることが必要なんです。練習場は地理的な問題と時間の制約があるから。

茂木 それに子どもたちの保護者が、今再開するよって言っても半分はやらないって言うと思います。強くこちらからは言えませんし。

高久 虎問題もありますが、練習場所、方法を工夫しないと難しいかもしれないですね。

高畑 ワクチンができるというニュースもあるから（2020年12月19日現在）、それがどうなるかにもよると思います。

高久 コロナ以前の問題、コロナの問題がある中で、じゃあ次はどうすればできるだろうと考えていらっしやる。お話を聞いていてとても元気になりました。ありがとうございました。